

[特別活動]

学級全体を自主的・自律的集団に高めていく学級活動の工夫

-学級内の係活動へのP D C Aサイクルの活用を通して-

齋藤 忠之*

1 はじめに

当校は長岡市の東側に位置し、長岡バイパスに隣接する新興住宅地の中にある。県内有数の大規模校である。全般的に落ち着いた雰囲気の中、本来の教育活動を推進できる学校である。また、生徒会活動を中心に、更により良い方向に進んでいこうとする積極的な取組が行える学校でもある。中でも、生徒会のリーダーとなる生徒は意欲的で、優れた判断力を備えている。他の生徒には、リーダーを支えるフォロワーとしての支持的風土が確立されつつある。

しかし、生徒会のリーダーが生徒会活動に積極的に取り組む反面、学級を母体として学校生活を向上させる場面が乏しいという問題点がある。生徒会活動が学校全体の核となってしまう、学級内の班長やリーダーが活躍する機会が少ない。また学級活動を通してリーダーを育成し、より良い学校にしていくという自主性や気概に欠ける傾向にある。

当校では昨年度から、学校全体の重点項目の一つとして「班長会や係活動を効果的に利用し、学級の支持的風土を高めていくこと」を掲げてきた。本実践は「学級内のリーダーを育てて、学級全体の規範意識を高め、学級全体を自主的、自律的集団に高めていく学級活動の工夫」への取組である。

また、本論文は平成19年度から平成21年度にかけて筆者自身が特別活動主任として、また一学級担任として、取り組んできた内容をもとに構成している。

2 研究の方法

平成19年度、特別活動主任になって気になったことが3点ある。

- (1) 学級目標と教育目標との関連性が薄いことと、年度途中で学級目標を振り返る機会がないこと。
- (2) 学級内のリーダーを育成していく取組が少ないこと。
- (3) 学級活動が学級担任の裁量に任されており、学級担任の力量に左右され易いこと。

(1)について

年度当初、学級目標はどの学級においても話し合いの中で決定されている。しかし、学級全体の目標であるべき学級目標が普段の生活の中ではあまり意識されておらず、生徒の目指すべき指針と成り得ていない。そればかりか、当校の教育目標「進取・敬愛」とはほど遠い内容や方向性が異なる学級目標も見られる。

(2)について

生徒会の各専門委員長はリーダー性を発揮し、生徒会活動を活発に行っている。しかし、各学級のリーダーや専門委員が力を発揮すべき場面が少ない。リーダーとは初めから存在するものでなく、学級内で意識的に育成していくものである。生徒の力によって学級全体を向上させる取組で、リーダーを育てる機会としたい。

(3)について

特に学級内の係活動については、学級担任による独自の部分が多く見られた。毎年クラス替えを行う当校において、各学年内や全校体制で足並みが揃えられる部分は、揃える。特別活動主任として方向性を示すべきだと感じた。

こうした現状から、「①学級目標の明確な位置付けと評価場面の設定、②学級活動の全体計画の見直し、③学級内のリーダーを育成する手立てとしてのP D C Aサイクルの活用」の3点から課題を解決していく。

* 長岡市立東北中学校

3 実践例

上記の①～③を達成するため、まず初めに特別活動主任としてできること、学級担任としてやるべきことに大別して実践を積んでいくことにした。

(1) 特別活動主任としての取組

① 特別活動部会の定期的な開催

当校は1年間をA期からE期までの5期に分けている。5期それぞれが終わる時期に、特別活動部会を開催した。各学年の学級活動担当の職員で集まる機会をもち、年間5回開催することができた。

定期的に特別活動部会を開催することで、職員の記憶が新鮮な内に話し合うことができた。そのため、反省点や来年度に向けた改善点がより鮮明になり、特別活動としての重点課題が明確となった。また、話し合いの内容を各学年部に持ち帰り、話題として各学年部会に提供することで職員会議を待たずして、次年度に向けたアイデアがまとまった。学級目標についても、部会の中で問題提起し話し合うことで、方向性を確認することができた。

特別活動部会からの提案1：「学級目標は、教育目標をより学級の事態に合わせて具現化したものにする。」

現状での問題点(1)：

学級目標と教育目標との関連が薄いことと、年度途中で学級目標を振り返る機会がないこと。

次年度への提言(1)：

当校の教育目標や担任教師や生徒の願いを十分に踏まえた上で作成することが望ましく、単なる語呂合わせや文字遊びのようにして作られるべきものではないことの確認。また、学級目標は常に生徒の指針とされ、定期的に振り返りを行う。見直す機会を設けなければ、形骸化してしまう。

そのことから「期ごとに学級目標の振り返りを行う場面を設定する。全校一斉に振り返るための時間を放課後に設定する。振り返りや評価をもとに、学級目標がより達成されるよう年度途中からでも達成に向けた取組を工夫し、場合によっては学級目標の見直しや改善も行う。学級目標は教室内のよく見える場所に掲示し、誰が見ても分かるように学級目標と教育目標の関連性を明記しておく。」ことが確認された。

特別活動部会からの提案2：「各学級の係活動の統一と、PDCAサイクルを活用した評価活動。」

現状での問題点(2)：

学級内のリーダーを育成していないこと、少ないこと。

次年度への提言(2)：

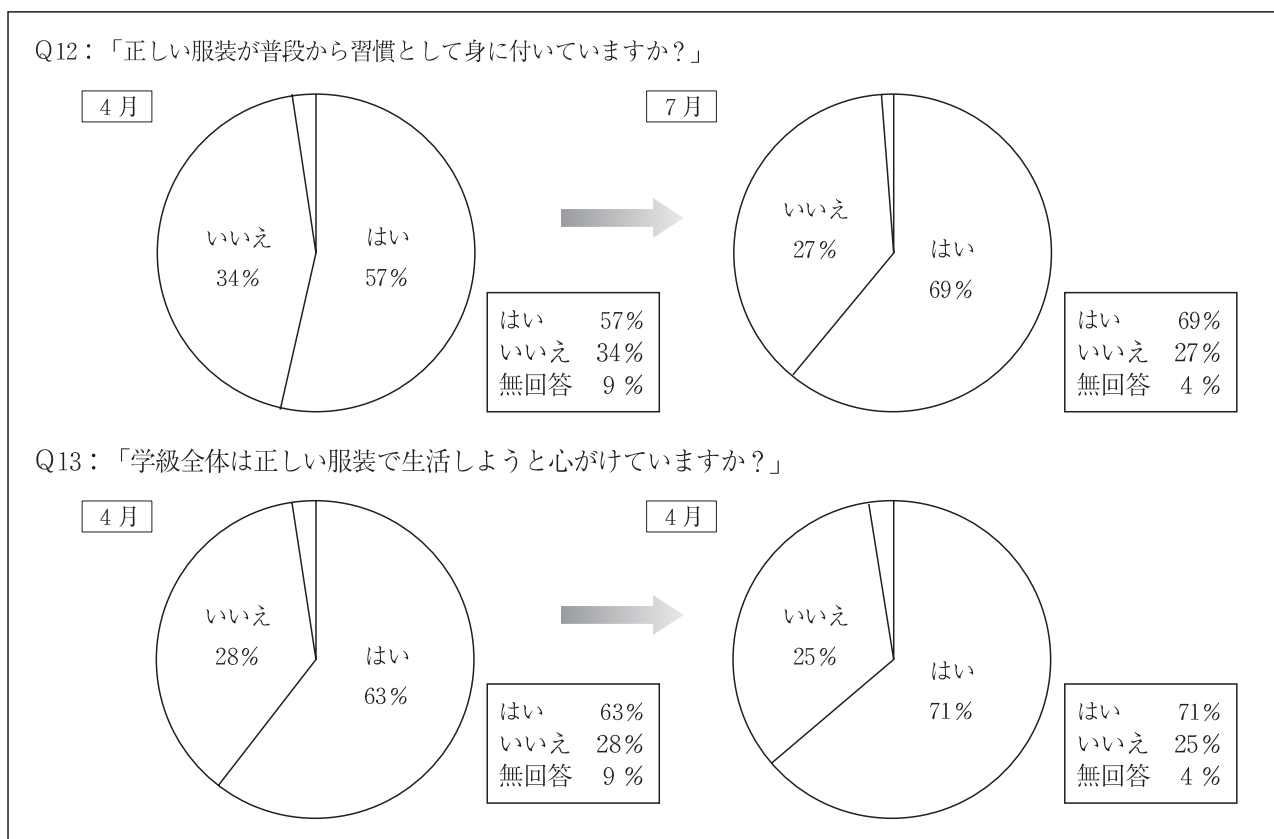
学級内のリーダーを育成する取組が少ないことに対して、学級内の生活班を活用してリーダー生徒を育てる手立てを講じること。

むことで、新卒の先生方が守られること、生徒もお互いの同じ活動をしていて安心感を覚えることなどを説明し、新年度をスタートさせた。

まず、統一することで見られた変化は、係活動と委員会活動の関わり方である。例えば、これまでは服装の乱れに対して、生徒会の生活委員会が集会時のみ服装の点検活動を行っていた。しかし、生徒の心情として「集会時のみしっかりすればよい。その時だけ直せばよい。」と考える風潮があり、なかなか正しい服装の習慣化とまではいっていなかった。ここで、専門委員会と係活動の連携させることで、各学級内の係生徒が日常的な点検活動を行うようになった。その結果、集会時だけでなく、日常的に正しい服装を意識する生徒が増えてきた。(資料1参照)

また、一つの事柄に対してより多くの生徒が多方面から取り組んでいくことで、生徒の規範意識を高まったように思われる。正しい服装を心掛けるべきであると考えた生徒も増加し、服装の乱れが少なくなっている。今後も、生徒会顧問との連携をより多く行っていきたい。

(資料1) 平成20年度4月と7月の自己評価の比較 (生徒会アンケートより抜粋)



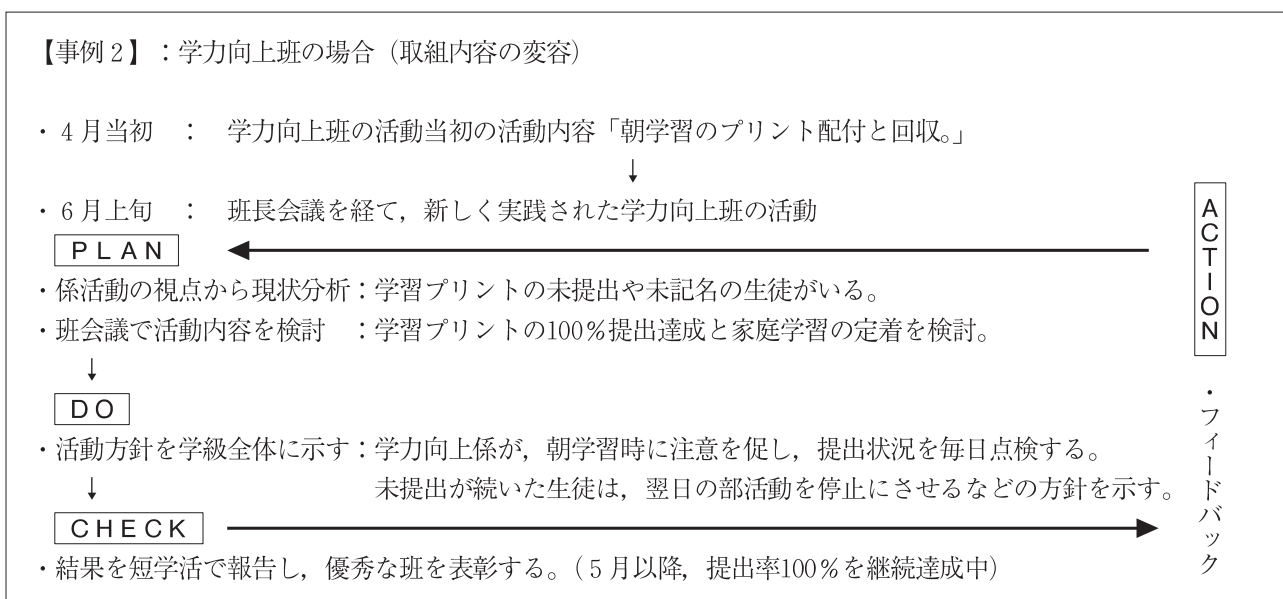
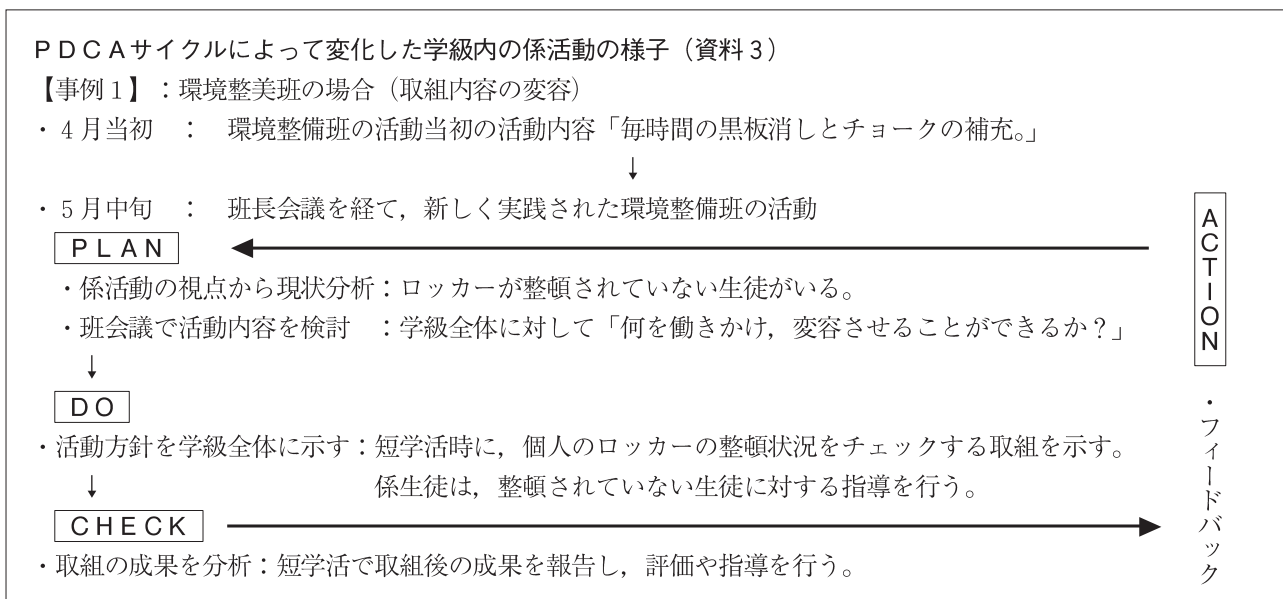
(2) 学級担任としての取組

① PDCAサイクルによる係活動の活性化

当校では、ポイントラリーが行われており、生徒会の委員会活動が非常に活発である。(ポイントラリー＝生徒会の各専門委員会が学級ごとに競うことができるキャンペーンを計画し、全校一斉となって取り組めるようにした企画。生徒会総務が各委員会の取組時期を調整し、様々なキャンペーンに集中して取り組めるようにしている。一定期間中に目標を達成した学級には得点が加算され、最終的に得点の高い学級が全校で表彰される。)ポイントラリーに取り組む意識は高く、全校一丸となって取り組んでいる。その反面、学級内の係活動は黒板消しや掲示物などの与えられた仕事に取り組むものの、学級を向上させていく工夫が乏しい。そこで、学級内の係活動を活性化させる取組として、P (Plan)・D (Do)・C (Check)・A (Action)のサイクルを活用した。まずは班内での話し合いから始めた。年度当初は学級活動の時間だけでなく昼休みや放課後を使い、話し合いを重ねた。パネルディスカッション、ブレインストーミング等の手法を取り入れながら「係活動で学級全体をより良い方向に導く工夫はないか?」「自分たちの力で友だちをより良い姿にしていくためには?」などの話し合いを幾度も重ねた。その結果、各班の係活動に少し工夫が見られた。例えば、広報係は掲示物を貼るだけでなく、学級独自の新聞を発行したり、季節に応じたイラストを教室後ろの黒板に描いたりするようになった。また、学力向上係は朝学習のプリントの回収だけでなく、学力向上させる

には私語チェックをしようなど、活動を工夫している。こういった様々な工夫が行われる中、現在は月1回ある放課後の学級優先日に実施する班会議と班長会議で十分に話し合えるようになった。

班長会議の中では、学級内の様子や専門委員の活動状況を分析し、不足している部分や学級としての毎月の重点目標を話し合って決定している。班長たちは、各期ごとにクラス内の重点目標を決定し、係活動を工夫・改善した取組を実行している。また、係活動の取組による成果は、定期的に短学活や学級会を用いて、評価・報告している。係活動の成果や反省をもとに、更に修正された案や新たな計画を立てるというサイクルを実施する。このように、PDCAサイクルを意識しながら実践を重ねるうちに、生徒自身の手で学級内の問題点を見いだせるようになってきた。学級内の係活動で学級全体をより向上させていこうという取組を定着させることができ、取組の成果を学級内の生徒にフィードバックすることで、お互いの日頃の頑張りを紹介し認め合う雰囲気ができ始めた。その結果、生徒自身にも張り合いがもたれ、より良い取組がなされるようになった。(資料3参照)



他にも様々な係活動で取組の改善が行われている。4月当初は問題意識や方策が見えず、活動が停滞していた班があった。一つの班が改善策を示し活動したことをきっかけに、他の班にも工夫や改善が普及していった。

また、これまで給食配膳時に生徒がだらだらと行動していた場合、教職員が叱咤激励することが多かった。しかし、

生徒自身の呼び掛けや工夫により、自ら注意し合う場面が多く見られるようになる効果もあった。生徒自身の評判も良く「自分たちで工夫したことに、みんなが協力してくれるので嬉しい。(A男)」「他の班が頑張っていると自分たちも何かやってみようと思う。(B子)」などの感想が聞かれた。自らの働きかけにより、学級がよりよい方向に進む活動を体験することで、リーダー性が高まってきたと思われる。

② 係活動における取組の成果を他に生かす方策

これまでの係活動に関わるもう一つの問題点として、班替えや席替えがある。これにより、これまでの班の取組が途絶え、一から指導し直すことがたびたびあった。そのことを避けるため、各班の一員を係活動に歴任させるようにした。歴任した班員は、係活動の引継ぎ役である。反省や改善点をファイリングして引き継ぐだけでなく、引き継ぎ用ファイルと共に次の班にうつり、取組の成果を受け継がれるようにした。引き継ぎ用ファイルには、それぞれの取組内容だけでなく、話し合いの様子も記録として残っており、次の班へと、そのまま引き継がれる。現在の1年生が使っているファイルは、昨年度受け持っていた3年生が使用していたファイルである。計画・実践し、蓄積してきた資料は、1年限りで終わりではなく、次年度に引き継ぐことができる。係活動の計画や運営が生徒自身の手で行うことを容易にしている。また、班長会議における話し合いのアドバイザーとして学年委員を配置した。それぞれの係活動の様子を客観的な立場で見学させることとした。学年委員は自分の学級の係活動の様子を学年委員会で報告し、よい活動内容は他の学級にも積極的に紹介させている。これにより、学年全体の係活動への取組が向上した。これは、係活動を統一したからこそできる一つの効果といえる。

4 成果

(1) 学級の係活動に対する意識の変容

生徒自身の専門委員会や係活動への取組が、数ヶ月の間に変容した。年度当初は、自分の委員会が何をすべきかわからずにいた生徒、与えられた仕事や当番活動のみに取り組んできた生徒がほとんどである。今では、どの委員も自分の委員会の存在意義を考え、自分たちで意識して学級へ注意を呼び掛けたり、気付いた問題点を発表している。整美委員が「ごみの分別ができていたのですが、私物のごみが混じっていました。私物は家に持ち帰って捨てるようにして下さい。」と連絡したり、報道委員が「校内放送が流れている間は、静かに聞くようにして下さい。」と注意を呼びかけたりするようになったのもその一例である。自分の働きが人の役に立っていることに充実感をもっており、自分の仕事に誇りをもって取り組んでいる生徒数も増加した。(資料4参照) これまでの学校行事に対して受動的に活動を行ってきた生徒たちが、自分の手で学級や学校をより良くしていこうと考え、日々の生活を大切にしていこうと考えられるようになったのは、一つ一つの取組に対して、PDCAサイクルを用い改善を加えながら、繰り返し工夫と改善、評価を繰り返してきたことの一つの成果である。

(資料4) 平成19年度3年自己評価と平成20年度1年生自己評価の変容

Q1. 委員会として、学級や学年に貢献できたと思うことがあるか。

3年38名	H19.4	H19.10	1年36名	H20.4	H20.6	主な傾向
思う	9人	17人	ある	5人	22人	3年生では委員長や総務ともなると貢献している意識が高い。比べて1年生では仕事分が分らず、4月当初はかなり低い。
思わない	28人	20人	ない	31人	14人	

Q2. 自分の学級が「専門委員や係の活動」によりよく改善されたと思うか。

3年38名	H19.4	H19.10	1年36名	H20.4	H20.6	主な傾向
思う	14人	34人	ある	12人	35人	1・3年とも専門委員会や係の改善がなされたと思っている。自分で貢献し、改善もされたと答えた生徒数ももっとも多い。
思わない	23人	3人	ない	24人	1人	

(2) 学級目標の明確な位置付け

期ごとに学級目標の振り返りを行う場面を設定したことで、学級目標を効果的に活用する学級が増えた。

ある学級担任の言葉：最初の頃は、「学級目標の達成度は何%ですか」などの質問で振り返りをしていました。どうも聞かれている生徒も私もじっくり来なかったのですが、最近では体育祭や合唱コンクールなどの様々な行事の前に「この行事にどうやって取り組むことで、学級目標の達成に迫れますか。」などと予め聞き、振り返りがしやすいよう工夫しています。常に学級目標が生徒の心の中にあるようで嬉しいです。(K教諭)

という感想もあった。その他にも学級目標の他、更に重点項目を決めている先生がいた。重点項目は、教育目標の「進取」の実現につながるもの、「敬愛」につながるものを決めてかなり教育目標を意識して作っているそうである。最初の頃に比べて、学級目標の振り返りについても好意的な評価を得ている。(資料5)

(資料5) 学級目標への各学級担任の意識調査結果より (H20)

Q1 「学級目標を振り返ることに賛成ですか。」 (学級担任21人中, 賛成13人)

Q2 「学級目標を年間通じて意識するようになりましたか。」 (学級担任21人中, なった18人)

Q3 「学級目標の作成に際し, 教育目標を意識しましたか。」 (学級担任21人中, 意識した21人)

5 今後の課題

生徒主体の活動をスムーズに行うため、班長会や級長指導に年度当初から取組、リーダー生徒の育成に努めてきた。しかし、級長や副級長、各班の班長のリーダー性を生かしてきた反面、学級全体から意見を取り入れ運営していく部分が少なかったため、現在は、次の2点について改善を加え、実践を進めている途中である。

(1) 6個の班で6個の工夫を！10個の専門委員会で10個の新企画を

全ての専門委員に新しい試みを発案し、実践させるよう時間と場所を確保し、改善点や取組の工夫を考えさせた。6月から「一委員一提案」を合言葉に学級内で行っている。そして、学級内の各専門委員は、互いの知恵を集結し相談し、活動することで、新しい取組が発案、修正されていくようにしている。

(2) 拡大班長会、学級全体会の開催

各班の代表生徒を集めて、班長会を開催しているが、実際は、各班での取組状況を報告する場となることが多い。現在は、月に一度のペースで全員参加の学級会を行うように心がけ、リーダー生徒以外に学級も諸問題解決に関わる場を作るようにしている。その中で、各班での実践している取組を紹介しあうことで、他の班での取組や工夫を学級全体に広めていくことができている。

6 終わりに

学級内の係活動の活用を通じた実践であるが、特別活動主任として学校全体を見据えた視点で活動内容を考えることができ、良い機会であった。生徒の自主性を育てるためには様々な活動に取り組むだけでなく、同時に活動そのものの取組状況や成果や充分に見取ることが大切であることを実感した。つまり、PDCAサイクルでいうところのC (check) 機能や適切な評価が生徒の自主性を高める。また、自分がこれまで実践してきた取組を見つめ直すことができた。今後更に研究を進め、全校一丸となって取り組む方法、学級のリーダーが学校全体を活性化させる取組へとつなげていきたい。

引用、参考にした資料・文献

- 1) 文部科学省、『中学校学習指導要領』, 国立印刷局
- 2) 文部省, 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』, ぎょうせい, 1999年
- 3) 上越教育大学 学校教育総合研究センター教育実践研究 第16集 『生徒の自治力・自主性を高める生徒会活動・行事の工夫』